

盛夏随想

焚き火をせんとや生まれけむ

中 里 信 和*



燃えるものには手当たり次第、何にでも火をつけたくなるのが私の性分です。

小学校3年生の頃、同級生のくまさじ君を誘って、裏山の小道の落ち葉をかき集めて、自宅の

裏の道の真ん中に積み上げたことがあります。マッチを持ってきて着火する寸前に、近所のおじさんに見つかり、焼き芋への夢は断たれました。私の生まれは陸前高田で、津波で流された地域よりは高台です。里山が遊び場で、ブナ、ミズナラ、ツバキ、スギ、そして北限と呼ばれる竹林が混成状態でした。近所の4歳上のくさちこ姉ちゃんには、山菜取り、麦踏み、堆肥作りなど、農家の仕事を教えてもらいました。囲炉裏があって、ここで私は薪や炭の楽しみを覚えました。今は薪ストーブに変わっています。東日本大震災の夜、近所の人たちが薪ストーブを囲み、一夜を明かしたのだそうです。

中学時代は同級生との焚き火です。広田半島には車では行けない秘密の入り江がありました。岩場でアワビや牡蛎を採って焼くのです。とくに同級生のくまなぶ君は田舎の生活力が強く、濡れた木でも刈ったばかりの生草でも、ブスブスと煙を出しつつ立派な灰にすることができる技を持っていました。都会のタキビストにはマネできないことです。

医師になり30歳を過ぎてからは、同僚と家族連れで5月の連休に山ごもりをするようになりました。今では希少価値であるく直火くが許可された山の中のワイルドなキャンプ場です。ここで友人のくひでふみ君くは大きな木を井形に組み、天

まで届けと炎を上げるのです。子供たちが小さかった頃には、着火を儀式として教え込みました。最初は落ち葉から始めます。次に小枝に着火させ、次第に太い枝をくべ、だんだんに束ねていくのです。いったん大きなオキリができればもう安心。あとは思いっきり太いのを、風よけの枕として寝かせ、これに合わせる木材との角度の開閉で、自在に火力を調整できるのです。

焚き火に哲学を持ち込む気持は毛頭ありません。けれど焚き火を見つめていると、神経内科の前教授、糸山泰人先生が退官した時の記念誌のエッセイを思い出します。ご自宅には暖炉があるので、そこでの着火の過程を、糸山先生は「大学での人材育成に似ている」と書いていました。最初は小さい火を慎重に作る必要があるが、いったんオキリができあがると、あとは自然に何でも燃えていくのだ、という内容。

キャンプでの焚き火の楽しみも、実は大きな炎よりもオキリです。オキリは調理に便利ですし、食事が終わったらオキリでお湯を沸かしつつ、オキリを囲む輪をズリズリと縮めていくのです。焼酎の薄いお湯割りなどを片手に夜が更けていくのは極上の幸せです。



* 東北大学医師会（東北大学大学院医学系研究科てんかん学分野教授）

盛夏随想

その後、子供たちが離れて親だけでのキャンプが続いていました。しかし今年の連休には、成人した子供たちが戻って参加となりました。昔のようにオキリを囲んで夜が更けますが、昔と違うのは全員が酒のグラスを抱えていることです。

焚き火の3要素は、燃える素材、酸素、そして熱。2010年発足の私の教室も、思えば小さい炎から始まりました。しかし大学とは不思議な場所です。看板を掲げると燃える素材が集まって来ます。燃やそうとする酸素もどこからか供給されて

きます。あとは熱を持つ素材同士が離れ過ぎないよう適度に接近させてやることです。酸素の心配よりも素材を寄せて熱を反射させあうこと、これが生草を燃やせる<マナブ君>から教わった極意なのでした。

おっと、いけません。焚き火に哲学は不要でした。この原稿を書き終えた今、キャンプは無理ですが、せめて裏山に見える自宅のテラスで炭でもおこし、焼酎のお湯割りでも作りますか。